

【エッセイ】 町中を自転車で走っている時、多くの段差がありました。歩いている時には何も感じないただの段差ですが、自転車で走っていると、ガタッと大きな衝撃があります。あまりにも大きな段差は歩いている人がつまづく原因にもなります。身近なところに多くある段差は誰でも被害を受ける可能性があるのです。

学校での交流活動では、車いすで移動する身体不自由の生徒と交流する機会がありました。その時、少しの段差でも車いすは持ち上げないと通ることができませんでした。砂利道を通ることもあり、大変でした。段差や砂利などの道は、車いすで移動するのはもちろん、自転車や歩行者にとっても交通が不便です。今の時代「ユニバーサルデザイン」や「バリアフリー」の言葉をもとに、病院や老人ホームなどはもちろん、多くの施設が段差のない通りやすいつくりになっています。ですが、外に出た時、外の道は通行しやすい道になっているでしょうか。外の道も車いすが通りやすい、不自由なく通れるような道に、そんな道にするべきだと思いました。簡単なことではないと思います。ですが、誰もが住みやすい街というのは、身近なところから変えていかないと変わっていかないと思いました。

段差のない道は通行がとても便利です。また、安全です。自転車で走っている時に段差を見つけても、「あ、段差があるな。」と思うだけで、普通に通れると思い通ろうとします。ですが、通ってみると思った以上に段差が大きかった、そんなときがあります。そのような段差があまりにも多い道や、自転車のかごに荷物を入れた状態で走っていると、とても危ないです。段差は高齢者の方や障がい者の方だけが不自由に感じるものではありません。わたしたちは普段何気なく生活していますが、危ないと感じたその段差は私たちにとっても不便で不自由に感じています。私は、町中に存在する不自由な生活のもとになる段差が少しでもなくなればいいと思いました。